ISSN 1344-9087
The Association for Northeast Asian Studies Newsletter "*Ushitora*" No. 56

東北アジア学術交流懇話会ニューズレター

うしとら

第56号

Contents

Topic: The Litvinenko Affair and the Future of Putin's Power .....(Kyosuke TERAYAMA) 1
Northeast Asian Reports: Report of Photograph Exhibition of Siberian Ethnography in Siberian Village :
Making Process of Exhibition and a Personal Account ..... (Yoshito CHIBA) 2-3
Members' Forum: Visiting Lecture `Japan and Asia´ in Novosibirsk State University. ..... (Masachika SHIOTANI) 4

論点

リトビネンコ事件とプーチン政権の行方

東北大学 東北アジア研究センター 准教授
（ロシア・シベリア研究分野）
寺山　恭輔

本来自分の研究はソ連のスターリン時代に関するものだが、全学教育で『ロシア現代史入門』と題してゴルバチョフのペレストロイカ以降、最近のプーチン時代にいたる時期のロシアについても話している。レニングラード出身で、現在は外国で映画を撮っているアンドレイ・ネクラーソフ監督のドキュメンタリー映画『暗殺リトビネンコ事件』も学生と一緒に鑑賞した。感想を読むとかなりの衝撃を受けていることがわかる。リトビネンコはプーチン政権を批判して英国に亡命、放射性物質ポロニウムを摂取したため2006年に死去した。英国警察は多大の時間と費用をかけ、リトビネンコと同じ旧KGBの要員がポロニウムで彼を殺害したと断定、その身柄引き渡しを拒否するロシアとの関係は、昨年のロンドン五輪時にプーチンが訪英するまでずっと冷え込んでいた。ところが、リトビネンコの死因をはっきりさせたいと彼の妻が英国の裁判所に提訴したため、この春からの審理で、新たな事実が公表される可能性も指摘されている。この映画はインターネットでも視聴できるので国家がテレビを支配するロシアでも、環境が整っていればリトビネンコによる痛烈なプーチン政権批判を目にすることができる。

反プーチン政権のデモ行進
（モスクワ2012年9月15日 -著者撮影-）

2012年5月に大統領に返り咲いたプーチンの支持率はⅠ期目（2000－04）よりもⅡ期目（2004－08）に入って拡大し、2008年9月には支持から不支持を引いた数は78（支持88、不支持10）にも上った（レヴァダ・センター）。それ以降、低下傾向に入り、支持率は常に6割を超えているものの、2011年6月以降、不支持が30％を下回らないようになった。直近の12年12月の調査では支持65％、不支持35％である。このところ毎年変わる日本の首相の最初の1カ月の支持率をすでに13年間も維持していることになる。したがって、2011年末の下院議員選挙における不正に抗議する市民が、反政権の集会を各地で繰り広げたものの、「モスクワの春」まではまだ遠いというのが現状であろう。ただし「アラブの春」同様、撮影された選挙における不正がネットに投稿され、ネットの中ではプーチン周辺のお友達による蓄財が攻撃され、プーチン退陣を求める署名活動も展開されているのは注目すべきだろう。ネットに対する統制を強めない限りこの流れは押しとどめられないのではないだろうか。「ネットがプーチンを殺すか、プーチンがネットを殺すかどちらかだ」との論評があると最近読んだ本から知った。リトビネンコは、そもそもプーチンが権力を獲得する初期の過程を問題にしており、彼の提起している問題はプーチンが退陣しない限り解明されないだろう。ともかく、英国におけるリトビネンコ事件の審理の行方に注目することにしたい。

東北アジア通信

調査地におけるシベリア民俗写真展実施報告：展示作業経過と感想

㈱千葉義人デザイン事務所・空間デザイナー　千葉　義人

2012年3月22日から24日にかけて、ロシア連邦サハ共和国エヴェノ・ブィタンタイ郡サクリール（バタガイ＝アリタ）村を訪問した。目的は、東北アジア研究センター・准教授の高倉浩樹氏が主催する「日本人のみたトナカイ遊牧民：シベリア民俗写真を現地に戻して展示する試み」での展示制作をおこなうためである。

私は、空間デザイナーとして仕事をしているが、同時に本センター客員研究支援者として高倉氏の応用映像人類学的研究＝展示実践を支援する活動もおこなってきた。これまでは東北大学内や仙台市内での活動であったが、今回はロシアにまで行くことになったのである。

訪問したシベリアの村は高倉氏が、1994 - 97年に日本人初の本格的シベリア人類学調査をした場所だという。彼自身再訪するのは15年ぶりらしい。展示の趣旨は(1) 研究資料として撮影した写真を当地の人々に返却することで、彼らにとっての記憶と記録に変換すること、(2) 2008年にセンターがおこなった仙台市でのシベリア写真展において、来場者の感想にあった「シベリアへの手紙」を翻訳し現地に届けることで、市民のあいだの文化交流を実施することであった。以下では、高倉氏に同行しながら展示をおこなった過程とその顛末について述べていきたい。

地図で見るシベリア北極圏内にあるサクリール村はとてつもない未知の場所に感じた。ロシアというお国柄から、事前に資材の委託配送ができないという話しが事前準備のミーティングの中であった。それは言い換えれば「展示会」を現地に持参するということである。そうなると移動する荷物は最小、最大効果的な物品選択が必要である。携行必須物品は生活用具、防寒対策の２週間分の着替えプラス展示品、展示具、施工道具である。行動する人数は２名。当然運搬能力には限界がある。

携行には大きく２つの制限がある。ひとつは重量、もうひとつはガサ、いわゆる容積である。今回は中国とロシア国内を飛行機で何度も乗り継ぐ行程なので搭乗荷物検査も非常に厳しく、搭乗過重量料金がいくらかかるか分からない財布にも厳しい状況が予想され、荷物のパッキングはとても重要で、最小限にしなくてはならない。展示物は事前に決めることができるが、展示目的を達成するための必要数量を確保する必要がある。今回は厳選した100枚のＡ４写真と、Ａ０サイズの写真10枚（巻いても結構な大きさ）、展示図録100部を携行することにした。情報展示として、環境演出としても効果のある映像展示は2008年の展示会で十分効果があったので、映像機器も持って行くことにした。映像機器と変圧器と図録だけで結構な重量と容積だった。

数量調整の利く物品は「展示具と施工道具」だけである。その内容、数量を決めるには展示の内容を知らなければならない。それには現地でどのような展示をおこなうか事前に決めなくてはならないということである。計画立案にあたって一番知りたいのは会場の大きさや、壁と天井の状況である。現地の状況が分かればどのような展示が可能か、展示計画が立てられる。展示の手法が推測できれば展示に必要な資材と道具が決まるし、どれくらいの展示が可能なのかという「展示のボリューム＝面積」が決められるのである。それは伝えたいことのクォリティが決まることでもある。現地の状況＝情報がどれくらい得られるかで計画の精度が決まる。

要望したのは、建物の図面（図面はあるほうが珍しい）と会場の写真であったが、事前に入手できたのは現地会場の数枚の写真であった。現地の状況を解析するためにアングルを考えて撮った写真ではないが、写真映像は多くのことを教えてくれた。会場の長手方向の片面がほぼ全面窓であること。反対側の壁には壁一面に絵が描いてあること。天井が高いことなどである。ラッキーだったのは、現地での世話人のアモーソフさんが写っていたことであった。人物が写っていれば、人物の身長を160センチとして空間の大きさが推測できるのである。大まかな会場の大きさが１枚の写真で確認できたのである。展示に必要な物品を現地で購入することは不可能であり、写真展示に必要な衝立なども入手できないことも想定してワイヤーとテグスを張って、それに写真を吊り下げる展示を考えた。それにはワイヤーの両端を固定できることが条件だが、会場写真を見て施工が可能だと判断した。展示に必要な掲示パネルや衝立が現地で入手できればそれと併用が可能となり、展示にバリエーションが出せると考えた。ワイヤーとテグスは巻いて大量に携行できること、搭乗検査が通りやすいこと、道具がほとんど要らないということで事前準備をした。しかしながら、実際に施工が本当に可能なのか不安は残った。なんとか現地で掲示パネルに転用できるものを探そうと考えていた。ちょっと長めの棒が数本でもあれば組み立てられるよう最低限の道具を準備した。

想像以上に搭乗荷物の検査は厳しく何度も荷物の出し入れの指示もあり、金額もかかったが、何とか現地入りできた。

東北アジア通信

まず、会場を見た。推測したとおりの空間であったが、壁がコンクリートであった。コンクリート用の釘は準備して行ったが、コンクリートの品質に問題があると大きな傷が残る可能性があるので、使用を断念した。窓枠などは木製なので、ワイヤー展示ができた。現地には公民館的博物館があり、そこに使っていない掲示パネルがあったので、借用することにした。角材でも板でもなんでも、とにかく借りて会場に持ち込み、どう扱うかは会場で決めることにした。とにかく会場の家捜しをし、使えそうなものをかき集め、展示具として活用した。２人の若者が展示作業を手伝ってくれた。「これは使えるか？」と、いろんなものを持ってきてくれたのも大変助かった。アモーソフさんにこんな形、こんな感じで展示がしたいんだ、と伝えると、どこからか材料を調達してくれ、格子（展示パネル）を組み立ててくれた。簡単な構造ではあるが、展示するには十分であった。遠隔地での移動展示は現地の人の協力と協働が大事だと痛感した。現地の皆さんの協力を得て、なんとか展示会場を設営できた。会場の倉庫にころがっていた枝のついた木を会場中央に高々と掲げ、展示会場空間のシンボルにした（**写真１**）。

写真１. 展示会場全景

前述した、片面が窓だった南面（緯度が高いので四方が南？）は窓の手前にワイヤーを使ってＡ０の写真を展示した。外光が写真を後ろからライトアップするので、写真が鮮やかになり、リアリティが増した。10枚が横１列に並んだので、迫力があった。映像展示ゾーンも一角に設営でき、回遊動線を採用した閲覧しやすい展示会場ができあがったのである。あとで聞いた話だが、彼らは展示とか、掲示は壁面にするもので、空間の中央で何かをするという発想はなかったそうだ。今回の展示を見て、今後のイベントのレイアウトの参考にしたいと言っていたそうである。

民族衣装を着て伝統儀式と歌で始まった展示会のオープニングは感動であった（**写真２**）。多くの人が来場してくれた展示会は大盛況で、その関心度の高さに驚いた（**写真３**）。研究資料としての写真は、時空を超えてトナカイ遊牧民と日本人の相互理解の架け橋になったのである。写真という媒体がもつ多面性を確認できた今回の旅は、私にとって興味深いものであった。写真は、四つの役割を持っていた。まず、研究資料。つぎは現地の人の生活の記憶・記録。さらに、遊牧民文化を異なる地域（日本）の人に紹介する媒体。最

写真２. 開会式の様子

後は、今回の展示をおこなったことで判明したことであるが、写真に写っている遊牧民の人達が、変化しつつある自分達の文化や生活環境を認識するためのツール（世代間をつなぐ情報）となったことである（**写真４**）。現地を紹介した日本のTV番組と仙台紹介の映像はたいへん反響が大きかった。映写するための器機と映写環境設営が必要であるが、映像の訴求効果は絶大である。しかしながら、特別な機器と環境を必要としない写真は情報伝達の最たるものと思う。今回は普通紙にプリントした写真を使用したが、それでも情報媒体としては十分であった。写真と映像は展示の主軸であり、展示効果が最大になるよう諸条件を見極めて活用すべきである。

写真３. 展示会場の様子

写真４. 民俗衣装での歓迎

会員の広場

東北アジア学術交流懇話会

お互いの交流拡大を目的に、会員皆様の近況・ご意見などを発信していただくスペースです（不定期）。
今回は、2012年11月にロシア・ノヴォシビルスク大学で開かれた東北大学・訪問講座「日本とアジア」および東北大学主催の「日露合同説明会」の様子や成果について、塩谷昌史助教にレポートしていただきました。塩谷助教は、ロシアを中心としたグローバル・ヒストリーの研究に積極的に取り組んでいます。

訪問講座「日本とアジア」in ノヴォシビルスク大学

東北大学 東北アジア研究センター 助教
（ロシア・シベリア研究分野） 塩谷 昌史

訪問講座「日本とアジア」の第4回目が、2012年11月13日-15日にノヴォシビルスク大学で開催された。今回、東北大学から参加した教員は、窪俊一・准教授（大学院情報科学研究科）、山田仁史・准教授（大学院文学研究科）、岡洋樹・副センター長（東北アジア）、高倉浩樹・准教授（東北アジア）、そして、私の5名であった。講師を担当されたのは、窪先生と山田先生のお二人である（写真1）。

今回の訪問講座のテーマは、「神話とサブカルチャーに映る現実と想像の力」であり、このテーマに基づいて、日本のポップカルチャーが御専門の窪俊一先生と、宗教人類学が御専門の山田仁史先生に講義を行っていただいた。窪先生の講義タイトルは、「カタストロフと日本のポップカルチャー」であり（写真2）、山田先生の講義タイトルは「神話とシャマニズム―日本・アイヌ・シベリア」であった。二つの講義に参加した学生は50人強を数え、ノヴォシビルスク大学・人文学部の学生だけでなく、外国語学部や経営学部からも聞きにきており、また、ノヴォシビルスク教育大学やノヴォシビルスク工科大学からの学生もいた。アンケート結果によると、参加者全員が二つの講義を共に分かりやすく、興味深いという回答を寄せていた。

今回、訪問講座とほぼ同時期に、東北大学主催で「日露合同説明会」がノヴォシビルスクで行われた（写真3）。11月13日にノヴォシビルスク大学構内で、翌日の14日にノヴォシビルスク市内の「シベリア北海道文化センター」で開催された。これは、ロシアから日本の大学に留学してもらうため、情報発信を行う企画である。東北大学だけでなく、秋田大学、筑波大学、東京外国語大学の教職員も加わり、4大学の広報・案内が行われた。訪問講座と日露合同説明会を同時期に開催したことは、ノヴォシビルスクの学生や教員に、東北大学を広くアピールする点で、極めて効果的だったと思われる。「日露合同説明会」がノヴォシビルスクで行われるのは、今回が初めてであった。しかし、外国の大学説明会がノヴォシビルスクで行われることは少なく、しかも、英語で履修できる留学プログラムが準備されたこともあり、初日には200名の学生が、二日目には100名近い学生が、日露大学合同説明会に参加した。

ところで、訪問講座は東北アジア研究センターとノヴォシビルスク大学人文学部との協定で5年間と明記され、2012年度が最終年度にあたる。これまでの事業の確認と今後何をするかが検討された。訪問講座開催に先立ち、11月13日の午後4時から、ラブレンティフ副学長、ブロドニコフ副学部長（人文学部）、ヴォイテシック学科長などを交えて、東北大学関係者と話し合いがもたれた。ラブレンティフ副学長は、東北アジア研究センターとノヴォシビルスク大学人文学部の交流が活発化したことを評価し、今後、両大学の交流が日本研究の領域に止まらず、他部局をも含む、学際的な学術交流となることを期待したいと述べられた（写真4）。例えば、ノヴォシビルスク大学の津波研究や、コンピュータ研究の領域で、東北大学と学術交流する余地があるとも言われた。ノヴォシビルスク大学には財政的余裕が生まれており、例えば、学際的なセミナーやコンファレンスを東北大学と共催するなら、大学の研究者を日本（仙台）に派遣することは十分可能とのことである。今後、お互いに話し合いながら、新しいプロジェクトに繋げて行きたい、という希望が表明された。

写真1. ノ大学にて、訪問講座関係者

写真2. 訪問講座の様子

写真3. 日露合同説明会の様子

写真4. ラブレンティフ副学長を囲んで

EDITOR'S NOTE 編集後記

今回の「うしとら」はロシア特集である。最初の寺山先生による猛毒ポロニウムがらみのリトビネンコ事件のお話は現代ロシアの暗黒面を覗かせてくれる。千葉さんのシベリア出張報告には従来なかったシベリアの人々との深い交流の実現がよく描かれている。塩谷先生のノボシビルスク大学訪問講座の報告からもシベリアの人々の日本への高い関心が伺われる。なお、本号の編集実務は金 賢貞・熊谷 香が担当した。（石渡 明）

"*Ushitora*" is a Japanese word for the "*Ox-Tiger*"; Northeast in the Chinese animal zodiac. (A.I.)

《うしとら》（東北アジア学術交流懇話会ニューズレター）第56号 2013年3月25日発行
発行 東北アジア学術交流懇話会
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41 東北大学東北アジア研究センター気付
PHONE: (022)795-7580 FAX: (022)795-7580
http://www.cneas.tohoku.ac.jp/gon2/ E-mail:gon@cneas.tohoku.ac.jp